

書評

奈良 勲 監修／鶴見隆正 編集

＜標準理学療法学 専門分野 全 8 巻＞日常生活活動・生活環境学

神先 秀人（京都大学医学部附属病院理学療法部）

臨床において、初期評価時に患者の社会的背景を把握しておくことは理学療法士として当然のことではあるが、「いつでも聞ける」、「そのうち聞けばよい」といった安易さからつい後回しになり、退院近くなって慌てて復帰後の生活を想定した理学療法や福祉用具の手配をすることがしばしばある。また、介護保険がスタートしてからは、車椅子1つを作製するのにも及び腰になっている自分に気付く。変化する環境や福祉制度に関する医療側の無知は患者の不利に直結すると痛感する。

機能的側面から患者がどの程度までの能力を回復するかを予測し、早期から退院後の生活を想定してADL指導や環境への働きかけを行うことや、患者が将来設計を立てる際にどれだけの選択肢を提供できるかは理学療法士の力量が問われる部分でもある。

本書は日常生活活動学と生活環境学の2部構成となっている。

日常生活活動は総論と各論に分かれており、第1章の総論ではADLの概念と範囲、ADLと障害、ADLとQOL、ADLと運動学、ADL評価、ADL評価方法の実際、ADLを支援する機器について、第2章ではADL指導の実際が片麻痺、脊髄損傷、脳性麻

痺、慢性関節リウマチ、人工股関節術後、下肢切断、神経筋疾患・難病について具体的に解説されている。生活環境学では生活環境学の概念、生活環境の評価と改善計画、生活環境と法的諸制度、生活環境としての住宅・住宅改造、高齢者の在宅生活サービス、生活を支える福祉・リハビリテーション関連機器、地域環境と公共交通の7章で構成されており、住宅改造の要点や社会保障制度から地域の環境整備等についてまでわかり易く述べられている。

本書の特徴としては、全体を通して患者の入院から退院後の生活に至る理学療法支援の一連の流れがイメージしやすい構成となっていること、各章とも写真や図表が数多く挿入されており視覚的にも理解を助けてくれること、各章、節毎に学習目標が提示されており段階を追って知識を整理するうえで役立つ点などが挙げられる。

理学療法士養成校の教科書としてはもちろんのこと、臨床の前線で活躍の各医療職の方々も是非、一読されてはいかがかと思う。きっと新たな発見に喜びを感じられることと確信する。

(B5 頁312 5,400+税 2001 医学書院刊)